

植民地における暴力の一表象 — 『アフリカ農場物語』 試論

土 屋 結 城

19世紀末イギリスに特徴的なジェンダー・セクシュアリティ表象の一端に、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) に代表されるダンディな男性がいるとすれば、もう一端には「新しい女」(New Woman) がいるだろう。1883年、『アフリカ農場物語』の出版によりロンドンの知識人たちの仲間入りを果たしたオリヴ・シュライナー (Olive Schreiner) は世紀末イギリスの「新しい女」について語る時に欠かせない存在である。エレイン・ショウォルター (Elaine Showalter) によれば、『アフリカ農場物語』のヒロイン、リンダル (Lyndall) は “the first wholly serious feminist heroine in the English novel” であり (199)、この小説は「新しい女」小説の先駆けの一つと見なされている。

本稿では、しかしながら専らフェミニズム批評の観点から論じられてきたリンダル像ならびに彼女の「新しい女」としての発言が描写される第2部のみに注目するのではなく、ポストコロニアリズム批評の発展、隆盛という批評動向に鑑みた際にもっと注目されてしかるべきであろう第1部、特にリンダル同様農場に住む少年ウォルドーの描写に焦点をあてる。特にウォルドーに振るわれる理不尽なまでの暴力を仔細に読み解くことにより、そのような暴力の表象が植民地の状況を描き出す上でどのような意味、意義を持っているのかを論じることを目的とする。

1. 植民地の縮図としての農場

本小説はそのタイトルが示す通り、南アフリカのケープ植民地にある農場を舞台に、そこに住む者たち、特にドイツ人の少年ウォルドー (Waldo) を中心として展開する第1部と、農場の子どもたちが成人してからを描く第2

部から成る。農場は元来はイギリス人男性が所有していたものだったが、今は彼の再婚相手のボーア人（アフリカーナー）のタント・サニー（Tant' Sannie）が所有しており、彼女は夫の連れ子のエム（Em）、エムの従姉妹のリンダル、ドイツ人監督者のオットー（Otto）、彼の息子ウォルドー、及び現地の使用人たちと暮らしている。第1部の物語が大きく展開するのは、農場にアイルランド人山師のボナパルト・ブレンキンス（Bonaparte Blenkins）が来てからである。彼は自らがナポレオンはおろかウェリントン公爵とも血縁であると偽り、言葉巧みにタント・サニーやオットーに取り入り農場で暮らすことになる。しかしブレンキンスは最初はオットーを計って死に至らしめ、次にはその息子のウォルドーに暴力を振るい、農場で支配的な態度をとるようになる。最後には、最初に言い寄っていたタント・サニーから、彼女の姪トゥラナ（Trana）に乗り換えようとしているところを、屋根裏部屋にいたタント・サニーに見られ、憤慨した彼女から追い払われて、農場から姿を消すこととなる。

まずこの作品の特徴として挙げられるのは、登場人物たちがシュライナーの生い立ち、人生を色濃く映し出している点である。ジョゼフ・ブリストウ（Joseph Bristow）やジェラルド・モンスマン（Gerald Monsman）が指摘しているが、シュライナー本人は12歳までミドルネームを取ってエミリーあるいはエムと呼ばれていた。母の旧姓はヒロインの名前と同じリンダルである。ウォルドーはシュライナーが尊敬し、影響を受けたとされるラルフ・ウォルドー・エマソンから取られたものと推測されている。さらにウォルドーの父オットー（Otto）はシュライナーのドイツ人の父親ゴットローブ（Gottlob）から名づけられているとの指摘もある（Bristow xxiv, Monsman 66-7, 79）。これらの名づけ方と、シュライナー本人がドイツ人の父とイギリス人の母を持つことを考えると、『アフリカ農場物語』に登場する子どもたちがイギリス人とドイツ人であることは示唆的である。すなわち、子どもたち、特に重要な役割を果たすウォルドーとリンダルは作者の分身であり、作者の何らかの側面をそれぞれ具現化していると考えることができる。

さらにこの人種の問題について考察すると、イギリス人、ボーア人、ドイツ人、アイルランド人、「ホットtentott」人、「カフィール」人がいる農場はまさに人種のるつぼであり、ケープ植民地の縮図ともいえる。J.M. クッツェー（J.M. Coetzee）の指摘通り、“This African farm is . . . , Schreiner's microcosm of colonial South Africa”（65）である。そして、ここで展開される

のは植民地の覇権争いを反映しているかのような農場の覇権争いである。南アフリカの植民地政策において優位に立っているイギリス人とドイツ人が、劣勢であるはずのボーア人、及びイギリスに支配され続けてきたアイルランド人から折檻され、支配されるのである。このアイルランド人ブレンキンスは、シュライナーが実際にドルドレヒトで出会ったアイルランド人をモデルにしているらしいが（大井、都築 236）、モデルがいるというだけでは、ブレンキンスの暴力性の説明はつかない。農場にいる者たちの人種構成に鑑みると、ブレンキンスやタント・サニーが支配するという構図は「反転した植民地化の不安」の具現化であるとの可能性があるのではないだろうか。

もちろん、スティーブン・アレータ（Stephen Arata）が論じた「反転した植民地化の不安」の本来の意味に則るならば、イギリス人に抵抗するのはアフリカ人でなければならないだろう。しかし、しばしば指摘されるように、シュライナーの作品においてはアフリカ人は脇に追いやられ、沈黙させられている。例えば、本作品の現地使用人たちは名前がなく、“the Hottentot maid”、“the Kaffir maid”と言及されるだけであり、描写されたとしても共感を持って描かれているとは言い難い。さらにウォルドーがエムのためにテーブルを作っている場面では、現地人は次のように表現されている：“As the long curls gathered in heaps before [Waldo’s] plane, he paused for an instant now and again to throw one down to *a small naked nigger*, who had crept from its mother, . . . From time to time *the little animal* lifted its fat hand as it expected a fresh shower of curls; *till Doss, jealous of his master’s noticing any other small creature but himself*, would catch the curl in his mouth and roll the little Kaffir over in the sawdust, much to that small animal’s contentment”（261 強調筆者）。ここで語り手は、現地人である黒人を代名詞“it”で受け、“the little animal”と表現し、さらには犬のドスと同等の“small creature”と見なしている。これらの表現は、当時の時代的背景を考慮に入れる必要があるにしても、現在の観点からすれば人種差別の誇りを免れ得ない。

この点については既に多くの批評家が指摘しており、本作品における黒人は“merely extras, supernumeraries, part of the background”である（Jacobson 25）、或いは、“relegated to the sidelines and treated with little or no sympathy”であるとの指摘がされている（Heilmann 139）。中にはプリストウのように、“*African Farm* mistreats the marginalized black Africans as entirely inferior species”であり、それはシュライナーの“evident insensitivity to native life

and ethnic differences”によるものであると否定的に評する者もいる (Bristow xxvii)。

特に興味深い解釈を示したのが、ルース・ファースト (Ruth First) とアン・スコット (Ann Scott) である：“Africans were kept so far outside white society that that in itself was a statement about it. The European frontier society insulated itself from the indigenous society but internalized the violence against it; hence the violence of Bonaparte and Tant’ Sannie’s behaviour. The blankness of it was the exclusion of those who were not white. Olive was writing, in fact, about what colonialism did to whites, and in her novel the children are both symbol and expression of that system and its consequences” (97)。しかし、「ヨーロッパの植民地社会が現地の者への暴力を内在化させた結果が、ブレンキンスとタント・サニーの暴力である」と結論付けるには留保が必要であろう。彼らの分析では、イギリス人、ドイツ人、アフリカーナー、アイルランド人などの区別が不問に付されてしまっている。さらに付け加えるならば、ブレンキンスとタント・サニーの暴力性にも違いがあり、その両者を同じ尺度で考察してよいかどうかとも検討する必要がある。

以上のことから、この作品では元来の意味での「反転した植民地化の不安」が描かれているとは言い難い。さまざまな人種が入り混じっていた南アフリカにおいては、現地人対イギリス人という単純な二項対立の図式が当てはまらず、原始的な力が文明化社会に襲いかかるという形式の「不安」があると短絡的に結論づけることはできない。しかし、ヨーロッパ社会の暴力がそのまま返ってきていると結論づけるのも早急に過ぎよう。この点に関しては、この農場で重層的に絡み合った権力関係を精査する必要がある。以下ではその具体例としてブレンキンスのウォルドーへの暴力を仔細に検討することにより、彼の暴力がどのような意味を持っているのかを検討したい。

2. play としての暴力

まず、ブレンキンスは人の良いドイツ人監督者オッターを言葉巧みにだまし、取り入った挙げ句、タント・サニーに「オッターがタント・サニーと結婚し、その財産を得ることを企んでいる」と嘘の密告をし、彼を農場から追い出そうとする。はたしてオッターはこの地を追われることになり、あまつ

さえ農場での最後の日、心臓発作と思われる症状で命を落としてしまう。その後、ブレンキンスが監督者の地位に収まるが、そこからブレンキンスのウォルドーに対する暴力が始まるのである。

最初にその暴力の矛先が向かうのはウォルドーが考案した羊の毛刈り機である。ウォルドーの言葉によれば、彼はこの機械の構想ならびに製作に9ヶ月もかけたのだが、ブレンキンスはそれを“we must get you a patent. Your fortune is made. In three years' time there'll not be a farm in this colony where it isn't working. You're a genius, that's what *you* are!”(74)と褒めちぎり、ウォルドーを有頂天にさせた後で、無惨にも足で踏みつけて破壊する。ブレンキンスのこの言葉だけ取ってみれば、彼は特許を取れるような代物を破壊したことにより、ウォルドーの経済的自立の機会を奪ったようにも見える。

しかし、その毛刈り機が、“It was only a toy of wood, but [Waldo] loved it”という程度の物であり、“the medley of wheels and hinges”(73)であると描写されている点に注目すると、それがブレンキンスの言葉やウォルドーの自信から推察されるような立派な物ではなかったことがわかる。語り手の描写に拠るならば、この機械はブレンキンスに破壊されなかったとしても、もともと大したものではなくちゃんと作動したかどうかも定かではないのである。つまり、ここで描かれているのは、ブレンキンスの暴力的な行為に関わらず、結局子どもは無力で自分の力だけでは圧制から逃れられないという圧倒的に絶望的な状況ではないだろうか。

では、そのような代物を破壊したブレンキンスの暴力行為にはどのような意味があるのだろうか。この点を考察する上で、ブレンキンスが立ち去った後の情景描写に注目したい：“The beetle was hard at work trying to roll home a great ball of dung it had been collecting all the morning; but Doss broke the ball, and ate the beetle's hind legs, and then bit off its head. And it was all play, and no one could tell what it had lived and worked for. A striving, and a striving, and an ending in nothing”(74)。このドスとはウォルドーの飼い犬で、ブレンキンスが立ち去ったのを、ウォルドーと遊べるようになるからか“cynical satisfaction”とともに見詰めていたが、ウォルドーが相手してくれないのを見て取り、カブトムシと戯れる。しかし、その戯れは、皮肉にもブレンキンスがウォルドーにしたことをなぞっているようである。引用文最後の“it was all play, and no one could tell what it had lived and worked for. A striving, and a striving, and an ending in nothing”というのは、カブトムシ

だけでなくウォルドーにも当てはまり、さらに言えば普遍的事実であるとも受け取ることができる。実際にこの2行は第2部のエピソードとして後に再び掲げられる。つまりこの場面では、ブレンキンスのウォルドーへの暴力がplayであるとの可能性が示唆されるのである。

3. 本を焼く

次にブレンキンスは、ウォルドーが屋根裏部屋で見つけた、エムの父の遺品の一つであるJ.S.ミル(J.S. Mill)の『経済学原理』(*Principles of Political Economy*)を燃やす。発端はエムが屋根裏部屋で自分の父の遺品である本を見つけたとウォルドーに話したことである。彼女はタント・サニーがそれらの本を燃やしたと思っていたのだが、実際は燃やされずに残っていたのである。ウォルドーは屋根裏部屋でその本の中から、J.S.ミルの『経済学原理』を手取る。そしてその中の“a chapter on property . . . — Communism, Fourierism, St Simonism”を読み、“All he read he did not fully understand; the thoughts were new to him; but this was the fellow’s startled joy in the book — the thoughts were his, they belonged to him. He had never thought them before, but they were his.”であり、“So he was not alone, not alone”であると思い、興奮する(76)。しかし、この本はブレンキンスに見つかり、ブレンキンスのモットー、“*Whenever you come into contact with any book, person, or opinion of which you absolutely comprehend nothing, declare that book, person, or opinion to be immoral*”(79)に従い、ブレンキンスとタント・サニーの手によって燃やされてしまう。屋根裏部屋に他にもまだ本があることを知ったブレンキンスはそれを燃やすようにタント・サニーに言いつけるが、タント・サニーは“The deceased Englishman had left all his personal effects specially to his child. It was all very well for Bonaparte to talk of burning the books. He had had his hair spiritually pulled, and she had no wish to repeat his experience”(81-2)と考え拒む。¹ 結局、ブレンキンスは屋根裏部屋の鍵を彼の許可なしには持っていくことができないようにし、満足する。

本を焼くという行為は比喩的な読み方を喚起するが、ウォルドーの立場からすると本とは一体何であろうか。ウォルドーはこの本を見つけたとき、自分は「一人ではない」と思って興奮する。この行動から考察すると、本は彼の精神的な支柱となる役割を果たしているように見える。

しかしこの小説の中では、本が必ずしも暴力に対抗し得るほどの力を与えてくれるものとしては描かれていない。例えば、ナポレオンについてリンダルやウォルドーが語り合う場面では二人の考えが次のように述べられる：“‘the brown history tells only what [Napoleon] did, not what he thought.’ ‘It was in the brown history that I read of him,’ said [Lyndall]; ‘but I know what he thought. Books do not tell everything.’ ‘No,’ said [Waldo], slowly drawing nearer to her and sitting down at her feet. ‘What you want to know they never tell’” (14)。ここでは、本はナポレオンが実際にどう考えたかは教えてくれず、自分たちが一番知りたいことは本には書かれていないものだとの会話が展開されている。さらに、第2部でウォルドーは、リンダルが既に亡くなったとも知らずに書く手紙において次のように述べる：“I had glorious books, and in the night I could sit in my little room and read them; but I was lonely. Books are not the same things when you are living among people. I cannot tell why, but they are dead. On the farm they would have been living beings to me; but here, where there were so many people about me, I wanted some one to belong to me. I was lonely. I wanted something that was flesh and blood” (227)。ウォルドーは第1部で見つけた『経済学原理』や第2部最初の章で見知らぬ旅人からもらった本（スペンサーの『第一原理』とされる）に興奮しながらも、成人し農場の外での苛酷な生活に耐えた後ではこのように語るのである。

さらに、ミルの本でウォルドーが興奮した一説が“a chapter on property . . . — Communism, Fourierism, St Simonism”であった点に注目したい。フーリエもサンシモンも、空想的社会主義、すなわち、実現不可能な説として批判された社会主義者である。なるほど本は精神的な支柱にはなるであろうが、現実に向き合っていくための実際的な解決策は与えてくれないのである。付け加えるならば、本と現実の区別がつかず、書物の世界に没頭してしまうオットーは現実世界と折り合いをつけることができず死んでしまう：“To the old German a story was no story. Its events were as real and as important to himself as the matters of his own life” (61)。²

では、本を焼くという行為そのものにはどのような意味が付与されているのだろうか。ポストコロニアル批評においては、「本を焼くという行為は解放の身振りともなれば、他の手段では自己主張ができないという無力さの表れでもあるだろう。もちろん通常この行為は、国家主義者がマイノリティの

文化に対して行う場合のように、抑圧と破壊を旨とするファシスト的な行動と考えられている。」(ヤング 33)。農場で支配的な地位を占めているブレンキンスとタント・サニーの行動が、無力な子どもウォルドーに向かっていることを考慮すれば、この抑圧と破壊を旨とするファシストの行動であるとの説明は妥当であろう。ブレンキンスのモットーからも明らかだが、彼らの行動の背後にあるのは理解できないものを恐れ破壊しようとする願望である。

さらにタント・サニーの役割に注目すれば、この場面はジーン・リース(Jean Rhys)の「彼らが本を焼いた日」(“The Day They Burned the Books”)を髣髴とさせる構図になっている。この作品では、イギリス人男性のソーヤー氏が残した本をカラードの妻が焼く。この行為は、「植民地主義そのもののアレゴリーというよりは、植民地主義におけるジェンダーによる権力関係の寓話として読めるだろう。そこでは何十年にもわたる家父長制的搾取と人種的・文化的偏見にもとづく侵害行為が女性によって反撃される。そのような優越感のもとである文化を、ソーヤー夫人が暴力的に拒絶するという身振りによって」と解釈され得る(ヤング 32)。

しかし、タント・サニーはソーヤー夫人とは違って、イギリス人の夫の残した本を焼くことはできない。彼女にできたことは、イギリス人の夫が残した本を1冊だけ取ってきた子からその本を奪う手助けをすることである。タント・サニーは超自然的な力を恐れるあまり、イギリスの植民地の家父長制に直接反抗することはできず、その抵抗は無力な子どもを媒介としてのみ実行可能なのである。もっとも、リースの短編とは違って、タント・サニーは十分に現地に溶け込んでいるとは言っても、白人入植者の子孫であり、カラードではない。先にも述べたように、本小説においては現地人は沈黙させられており、混血の者もそれと同様の扱いである。タント・サニーがソーヤー夫人のように直接本を焼かないのは、イギリスに対抗し得るほどの原始的な力を持っていないからであろうか。

4. 植民地の父

ブレンキンスの三番目の暴力行為が、本を手に入れるために屋根裏部屋に忍び込んだウォルドーを見つけ、彼にドライ・ピーチを食べていたという濡れ衣を着せて、鞭で打って燃料小屋に縛りつける行為である。これは、身体を自由を奪う行為であるとも解釈できよう。

さらにこの二番目と三番目の折檻については、屋根裏部屋という共通点がある。実はブレンキンスはこの屋根裏部屋を恐れている：“The loft was unknown land to Bonaparte. He had often wondered what was up there; he liked to know what was in all locked-up places and out-of-the-way corners, but he was afraid to climb the ladder” (75)。そして、タント・サニーも4年この農場にいて、一度も屋根裏部屋には入ったことがないと言う。：“I have been in this house four years, and never been up in the loft.” (95)。

彼らはなぜ屋根裏部屋を恐れるのであろうか。まずブレンキンスがウォルドーの父たらんとしている点に目を向けたい。ブレンキンスは折に触れ、ウォルドーに“Waldo, answer me as you would your own father, in whose place I now stand to you” (89)と声をかけたり、“I shall act as a father to you, Waldo” (92)と述べたりする。これらの言葉から考えると、ここで行われているのは誰が父となるかの覇権争いであると考えられる。この点に関して、モンスマンは次のように述べている：“Blenkins is an ironic metonymy [sic] for South African frontier society as a whole, both as a rigid patriarchy and as a racial caste system. . . . Blenkins proclaims himself as superior and conceals his own past and dark nature in order to suppress that aspect of himself which he projects onto others. . . . Blenkins is . . . a parody of all the roles of male dominance: overseer, schoolmaster, preacher . . . , and surrogate parent to Waldo” (63)。

そして第1部を通してこの農場の覇権争いに影を落としているのは、エムの父親、農場の元所有者のイギリス人男性である。屋根裏部屋はエムの父の形見、特に本が残っている場所である。それを受け継ぐということは、農場の支配権を象徴的な意味で受け継ぐということになるのではないだろうか。屋根裏部屋から書物を奪うことは、西欧の知識を身につけ、エムの父親が保持していた権力を受け継ぐことの象徴となり得る。ウォルドーは、ブレンキンスたちの父としての権力を脅かす行為に及んだために罰せられたのではないだろうか。この行為について、プリストウは“Eager to dominate any rivals for his crown, this ironically named ‘Bonaparte’ takes his vindictive impulses out on the weakest members of the farm community” (xvi)と分析しているが、リンダルやエムにウォルドーほどの暴力が振るわれていない点を考慮すると、“the weakest members”にその衝動が向かっているとは言い切れない。やはりその衝動は農場の覇権争いの対象者に向かっていると考えるべきであろう。

ブレンキンスは屋根裏部屋だけでなく、幽霊の存在に代表されるような超自然現象を恐れており、実は臆病な性格であり、ブレンキンスの暴力は彼の臆病さの裏返しでもある。彼は自分の権威を失墜させる可能性があるものに対して、その臆病さゆえに過剰に反応しているのである。

そして、この農場が「植民地の縮図」だとするならば、ここで行われているのは植民地の覇権争いの縮図でもあろう。農場で父親の役割を果たしていたドイツ人監督者を追い落とし、今は亡きイギリス人農場主に代わって農場の支配権を握ろうとするアイルランド人が、自分の権威を脅かし得る知の力を得ようとしたドイツ人の子どもを折檻する、という構図である。彼は最後には恐怖を克服して屋根裏部屋に上がったポーア人女性に追い出されるが、そのポーア人はイギリス人男性の遺言に従うしかなく、エムが結婚するまでしか農場の支配権を保持することはできない。反転する植民地化は達成されず、イギリス人の権力は彼が亡くなった今でも農場を覆っているのである。

5. 暴力の連鎖を断ち切る

これらの圧倒的な暴力への対抗策として、リンダルは力を欲する。ナポレオンへの熱狂やオットーが追い出される日に部屋に閉じ込められたリンダルの言葉に見られるように、もともと彼女は力への欲求を持っている：“When that day comes, and I am strong, I will hate everything that has power, and help everything that is weak” (60)。さらにウォルドーが折檻された後、彼を助け起してリンダルは次のように言う：“We will not be children always; we shall have the power too, some day” (94)。リンダルが学校に行きたいとの欲求を持っていることや、その知識でブレンキンスのでまかせに対抗する場面もあることから、この力は知の力である可能性があるが、ナポレオンへの傾倒ぶりや、ブレンキンスに対抗する意思に鑑みると、身体的な力をも意味しているであろう。

しかし、暴力に暴力で対抗しても、結局は暴力の連鎖を生み出すだけではないだろうか。リンダルのナポレオン崇拜は皮肉な形でそれを示している。ナポレオンの名を騙る者は、その力を弱者へと、すなわち、リンダルの考えからすると間違った形で暴力を向ける。

さらに、この点に関して示唆的な場面がウォルドーが製作した羊の毛刈り機が壊される場面である。ウォルドーの機械が壊され、ブレンキンスが立ち

去った後の場面に再び注目したい。ドスの戯れが、ブレンキンスがウォルドーにしたことをなぞっているようであることは既に指摘した。この農場は、植民地戦争の真っ只中という歴史的な文脈におかれ、農場内ではあたかもその縮図であるかのような抑圧者と被抑圧者の闘争が描かれているが、さらにその縮図が犬とカブトムシの間で展開される。この世界の暴力は入れ子のように無限に連鎖しているのである。

ではこのような暴力の連鎖を終わらせるのは何であろうか。本作品において、それは神の存在ではない。この小説世界においては、祈りに答えてくれるというような“a personal God”は存在しない (Coetzee 64)。キリスト教に基づく博愛、或いは歓待の精神でもない。これもオットーが証明済みである。聖書を盲目的に信じるオットーは、ブレンキンスが現れたとき、福音書に記されている神の教えを思い起こし彼を家の中に招き入れてしまうし、ブレンキンスの法螺話にリンダルが疑いを抱いたときも、聖書のエピソードを引合いに出してたしなめ、ブレンキンスの話を信じてしまう。しかしオットーの頑なまでのキリスト教信仰はブレンキンスに悪用され、ブレンキンスの暴力を加速させてしまう。

では何が暴力の連鎖を断ち切るのでしょうか。ウォルドーとブレンキンスが最後に言葉を交わす場面を見てみたい。ブレンキンスはタント・サニーの姪トゥラナに手を出そうとしているところを、タント・サニーに見つかり、怒り狂った彼女によって農場から追い出されてしまうが、その際彼はウォルドーに助けを求め一晩の寝床を提供してもらい、少々のお金を無心する。プリストウはその場面を次のように分析している：“Finding Blenkins both food and money, Waldo displays extraordinary tolerance towards his former persecutor. His humanity is greater by far than those who hold power over him.” (xvii)。さらに、赤岩隆氏はこの場面でのウォルドーは「天使のように寛大に求めるものをすべて分け与える」と要約している (116)。

しかし果たして彼の行動は tolerance なのであろうか。例えば、一日何も食べていないと乞うブレンキンスに対し、ウォルドーは目も合わせずただ“‘Eat!’ said Waldo after a moment, bending lower over his dog” (98) と必要最小限の言葉しか発しないし、鞭打ちのことを弁明するブレンキンスに対しても、“But [Waldo] walked off” (99) とつれない態度を取る。ウォルドーは終始一貫このような態度で、物を乞うブレンキンスに対しては必要最小限の指示しか与えず、弁解をするブレンキンスに対しては答を返さない。ウォル

ドーのこのような態度は、寛容というよりは、暴力を受け続けた結果の無気力、無関心であるように見える。

確かに寛容は暴力に対する解決策、対抗策として挙げられることがあるが、ウォルドーの反応は、暴力を受け続けた結果、被害者は無気力状態に陥るといふ現実を反映し、そのような解決法を机上の空論に帰してしまうもののように見える。しかしウォルドーが一瞬、暴力で対抗する素振りを見せる場面があることを考慮に入れると、彼の無気力にも肯定的な意味を見出すことができるのではないだろうか。ウォルドーは、ブレンキンスに鞭で打たれた後、その目に“a wild fitful terror”を宿す(92)。ブレンキンスはその光を恐れ、早々にその場を立ち去る。その後も燃料小屋に放っておかれたウォルドーの心には“wild thoughts”がよぎる(93)。ウォルドーがこの“terror”や“wild thoughts”を実行に移せば、ブレンキンスに対抗する暴力となったであろう。しかし、結局この“terror”は噴出することはなく終わる。

こうして寛容とも無気力とも取れる態度でいることにより、ウォルドーは暴力の連鎖を断ち切る。これが、この小説で描かれている、植民地での現実的な暴力の連鎖の断ち切り方なのではないだろうか。

注

¹ “He had had his hair spiritually pulled”とは、オットーがブレンキンスの策略により死んだ後、リンダルが一種の報復として、鳥にブレンキンスの髪の毛を突つかせた出来事を指している。ブレンキンスはそれがリンダルのいたずらによるものとは気づかず、オットーの幽霊か何かのしわざだと思い、パニックを起こしたのだ。

² さらなる考察としてはモンスマンを参照のこと(92)。

参考文献

- Arata, Stephen. *Fictions of Loss in the Victorian Fin de Siecle: Identity and Empire*. 1996. Cambridge; Cambridge U P, 2008.
- Berkman, Joyce Avrech. *The Healing Imagination of Olive Schreiner: Beyond South African Colonialism*. Amherst, Mass.: U of Massachusetts P, 1989. (ジョイス・パークマン著、丸山美知代訳『知られざるオリヴ・シュライナー』晶文社、1992年)
- Bristow, Joseph. Introduction to *The Story of an African Farm*. By Olive Schreiner. 1883. London: Oxford U P, 1998.
- Clayton, Cherry. *Olive Schreiner*. New York: Twayne Publishers, 1997.
- Coetzee, J. M. *White Writing: On the Culture of Letters in South Africa*. New Haven: Yale UP, 1988.
- First, Ruth and Ann Scott. *Olive Schreiner*. London: Andre Deutsch, 1980.

- Heilmann, Ann. *New Woman Strategies: Sarah Grand, Olive Schreiner, Mona Caird*. Manchester: Manchester U P, 2004.
- Jacobson, Dan. Introduction to *The Story of an African Farm*. By Olive Schreiner. 1883. Penguin, 1995.
- Monsman, Gerald. *Olive Schreiner's Fiction: Landscape and Power*. New Brunswick: Rutgers UP, 1991.
- Rhys, Jean. *The Collected Short Stories*. New York: Norton, 1987.
- Schreiner, Olive, *The Story of an African Farm*. 1883. Oxford: Oxford U P, 1998. (オリーヴ・シュライナー作、大井真理子、都築忠七訳『アフリカ農場物語』上・下、岩波文庫、2006年)
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. London: Virago, 2001.
- 赤岩隆 「『アフリカ農場物語』論：アレゴリーの功罪」、『テキスト研究』第2号、2005年、111-29頁。
- 「オリーヴ・シュライナー序論—小説と観念—」『英語青年』第120号12巻、2006年、746-49頁。
- 上野和子 「オリーヴ・シュライナー『アフリカ農場物語』：進歩、女性、帝国論—カール大地に吹く赤い風—」、『学苑』第792号、昭和女子大学、2006年、22-36頁。
- 大井真理子、都築忠七 「訳者解説」、オリーヴ・シュライナー『アフリカ農場物語』225-58頁。
- 前川一郎 『イギリス帝国と南アフリカ：南アフリカ連邦の形成 1899～1912』ミネルヴァ書房、2006年。
- ヤング、ロバート J.C. 『ポストコロニアリズム』本橋哲也訳、岩波書店、2005年。